論文

中外古地図上の南海諸島

The South China Sea Islands in Old World Maps

班　偉 [1)]

Han I

キーワード：南シナ海、東沙諸島、西沙諸島、南沙諸島
Key Worlds: South China Sea, Pratas Islands, Paracel Islands, Spratly Islands

はじめに

中国が周辺国と領有権を争う南シナ海問題で、オランダ・ハーグの常設仲裁裁判所は2016 年 7 月 12 日、中国が独自の権利を主張する境界線「九段線」に国際法上の根拠はないとの判決を出した。これは南海諸島問題を巡る初の司法判断で、提訴したフィリピンの主張をほぼ全面的に認める結果となり、中国が進める人工島造成は活動の正当性を失った。案の定、中国当局が猛反発し、「一片の紙屑」と切り捨て、判決を受け入れないと表明した。その後も、中国が人工島造成を急ぎ、周辺海域で「航行の自由作戦」を展開するアメリカとの対立をエスカレートさせていく。尖閣諸島の領有権論争と同様、中国側は自己主張の証拠材料として、文献史料とともに古地図も屡々持ち出しているが、史料の取捨・扱い方・解釈を巡って、牽強付会・支離滅裂の謗りを免れない(1)。本稿では、中国・西洋・日本三方の古地図の解析に焦点を絞り、歴史上、南海諸島がどのように描かれていたかを検証し、南シナ海及び南海諸島に関する認識の変容の軌跡を辿ってみることにする。

一、明清輿図における「長沙」「石塘」の描き方

「汗牛充棟」と言われる中国史籍の中で、南シナ海と思しき記述が初登場したのは後漢・三国期の雑記の中だった。楊孚『異物志』（後漢、76～88）、万震『南州異物志』（三国・呉）、康泰『扶南伝』『外国雑伝』（三国・呉、227）の文中、「漲海」「崎頭」「珊瑚洲」といった地名が散見され、中国論客がそれを以って、「漲海とは南シナ海」「崎頭・珊瑚洲とは今の南海諸島」と断定するのだが、裏付ける根拠は何も示していない。実際、諸史料の用例を見ると、「漲海」は中国の南に広がる海域を広く指す言葉で、南シナ海に限らず、遥々インド洋や地中海に及ぶ。「崎頭」「珊瑚洲」も、広範囲の海域に散らばる岩礁・暗礁・浅瀬・砂洲を意味し、特定の島を指しているわけではないことがよく分かる。いずれも漠然とした表現・用語で、現在の南シナ海・南海諸島を指し示す固有名詞ではないのだ。

1)山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

年代が下り、宋元期に入ると、海外交易・航海業が盛んになるにつれ、「南海」「南方海」「七洲洋」「大洋海」などの用語も現れ、周去非『嶺外代答』(1178)、佚名『瓊管志』(1203～1208)、趙汝適『諸藩志』(1225)、汪大淵『島夷志略』(1351) などの書物において、「長砂」「石塘」「石床」「千里長沙」「万里石塘」といった地名が使われている。これを鑑み、中国人の間で南シナ海に関する認識が深まったことが窺えるが、「当時、南海諸島はすでに中国領になった」と決め付けるのは余りにも短絡的である。関連史料を吟味すると、伝聞・転写・呼称の混用が多く、地名の考定も覚束ない。文脈を素直に捉えるなら、「吉陽軍」(現在の海南島) 行政区の環境・方位・四隅・周辺国との位置関係を説いているだけで、「長沙」「石塘」の帰属を意味するものではないことは一目瞭然だ。「七洲洋」などの描写も含めて、帆船航行の危険水域として認識されたことが言えるが、中国船の南海諸島への着岸とか、中国人の漁業・上陸・居住を示唆するような記述など皆無に等しい。

一方、こうした文字史料と比べ、「千里長沙」「万里石塘」を描いた地図はかなり出遅れ、明代後期に入って漸く現れたものだ。現存する中国最古の地図として知られる「九域守令図」(北宋、1121)、「禹跡図」(南宋、1136)、「華夷図」(同)、「地理図」(南宋、1190) の四図を調べたところ、いずれも「瓊州」(現在の海南島) を描いたものの、南海諸島・尖閣諸島どころか、台湾の表記すら欠如しているのが実情である。

中国論客も認めるように、「長沙」「石塘」を描き表わした最初の地図は、明代羅洪先の地図集『広輿図』(1555) の中の「東南海夷図」で、後の系統輿図の殆どが『広輿図』の焼き直しに過ぎない。南海諸島と思しき幻影が見つかると、つい「歴史的証拠」に仕立てようとする余り、中国論客は自家撞着したことに気付かない。第一に、『広輿図』は 45 種の輿図を収録しているが、中国地図である「輿地総図」「広東輿図」には「瓊州」が見えるが、「長沙」「石塘」は見当たらない。第二に、標題は「〇〇海夷図」である以上、「婆利」(バリ島)「蝦夷」(北海道) 及び諸々の架空の「海夷」に混じって描かれた「長沙」「石塘」だけ切り取って、中国領の飛び地とするのは無理がある。第三に、次図「西南海夷図」に別の「石塘」が描かれている(2)。私見では、『広輿図』に「長沙」「石塘」が描かれたのは、羅洪先が様々な地理書から得た情報を鵜呑みにして、風聞した「海夷」の名前を全部描き込んだ結果に過ぎない。「海夷図」に描いたことは「夷」と思ったからであって、自国領と思う島をわざわざ「海夷図」に描き入れることはあり得ない。古代文人にありがちな衒学的趣味を好いことに、自説の根拠として利用しようとする下心が見透かされる。

『広輿図』の他に、章潢『図書編』(1577)、王圻・王思義『三才図会』(1609)、茅元儀『武備志』(1621) など明代の類書・兵書も、『広輿図』を模した「東南海夷図」「西南海夷図」を掲載し、「長沙」一個と「石塘」二個を描き表わしている。『図書編』所収の「四海華夷総図」「古今形勝之図」「広東図」「広東郡県図」といった国内地図を見ると、「瓊州」が描かれているが、「長沙」「石塘」は欠如している(3)。『三才図会』の「山海輿地全図」「華夷一統図」「広東輿図」「広東沿海総図」「中国三大幹図」には、「長沙」「石塘」は見当たらない(4)。『武備志』の場合、巻一百八十九「一統総図」、巻二百「広東形勢図」「広東郡邑図」「広東方輿図」があるが、いずれも「瓊州府」があって、「長沙」「石塘」はない。更に巻二百十「輿地総図」「日本入犯図」「広東沿海山沙」、巻二百十三「広東沿海総図」の図面を確認したところ、結果は同じだ(5)。「混一疆理歴代国都之図」(1402) (6)、「大清万年一統天下全図」(1811)、「大清万年一統地理全図」(1814) など(7)、中国論客が取り上げた「証拠」

には、確かに「千里長沙」「万里石塘」が見られるが、形状が円形から島の図柄に変わったものの、諸々の「海夷」に混じって描かれている構図は変わらない。

さて、『武備志』と言えば、巻二百四十「鄭和航海図」は余りにも名高い。「鄭和の西洋下り」（1405～1433）の全航程を記録した二十四図のうち、「石星石塘」「万生石塘嶼」「石塘」と表記する図柄が水平方向の一列に並ぶ十一図について、韓振華らが「石星石塘」は東沙諸島と中沙諸島、「万生石塘嶼」は南沙諸島、「石塘」は西沙諸島をそれぞれ表しているという欲張りの比定をした上、「鄭和船隊が西沙・南沙を通っていた」と断じるが、辻褄が合わない。第一に、三つの「石塘」の位置・配置を見ると、西沙諸島が東沙諸島から南西へ500キロ以上、南沙諸島が西沙諸島から南へ600キロ以上離れている実態に合わない。第二に、鄭和航海図では船隊が辿った航路が点線で示されており、終始海岸に沿った航行をしていたことが一目瞭然だ。敢えて航路を外れ、遠回りしてまで航海の難所として知られていた西沙諸島・南沙諸島に近づくことは考えにくい。現に、航路を示す点線に針路の添え書きが読み得る。十一図の針路（復路）を見ると、「外羅山内過、癸丑及単癸針、二十一更船、平獨猪山……獨猪山丹艮針、五更船、用艮寅針、十更船、平大星尖外過」とあり[8]、「外羅山」はベトナム広東群島の李山島（Dao Ly Son）、「獨猪山」は海南島万寧県の大洲島、「大星尖」は広東平海の近海に浮かぶ針岩頭にそれぞれ当たると解される。鄭和船隊が「外羅山」「獨猪山」「大星尖」と「石星石塘」「万生石塘嶼」「石塘」の間、つまり西沙諸島より遥か北の海域を航行していたため、航路から遠く離れている「石星石塘」「万生石塘嶼」「石塘」が針路の注記に出てこないわけである。第三に、鞏珍『西洋番国志』（1434）、費信『星槎勝覧』（1436）、馬歓『瀛涯勝覧』（1451）など鄭和遠征随行者の見聞録や、祝允明『前聞記』（16世紀初）を調べたところ、「長沙」「石塘」への言及は全く存在しない。「鄭和一行は南海諸島を占拠、支配していた」云々、所詮こじ付けの解釈だ。

なお、『広輿図』系列の明代輿図として、他にも王在晋「東南海夷図」（『海防纂要』、1613）、張燮「東西南海夷諸国総図」（『東西洋考』、1618）、呉国輔「今古華夷区域総要図」（『今古輿地図』、1638）、呉学儼「東南海夷図」（『地図綜要』、1643）などが現存するが、いずれも『広輿図』「海夷図」の転写・復刻に外ならず、「長沙」「石塘」は中国領ではなく、「界外」「海夷」の一員と見做して描かれていることに変わりはない。

逆に、「長沙」「石塘」を記していない明代輿図の方が圧倒的に多く、しかも名品揃いだ。図名を挙げると、「大明混一図」（佚名、1389）、「楊子器跋輿地図」（佚名、1512）、「大明輿地図」（李默、1547）、「広東地理総図」（戴璟、1553）、「古今形勝之図」（喩時、1555）、「全海図」（宋応昌、1591）、「乾坤一統海防全図」（董可威、1592）、「王泮識輿地図」（佚名、1594）、「乾坤万国全図古今人物事跡」（梁舟、1593）、「広東沿海図」（郭棐、1602）、「周天各国図四分之一」（王在晋、1613）、「皇明大一統地図」（陳組綬、1636）、「大明万世一統図」（呉国輔、1638）、「華夷古今形勝図」「天下輿地分里総図」（呉学儼、1643）、「天下九辺分野人迹路程全図」（曹君義、1644）等々、枚挙に暇がない。羅洪先や章潢と同様、王在晋、呉国輔、呉学儼らも「海夷図」にこそ「長沙」「石塘」を描き入れた半面、全国地図である「一統図」「天下図」には決して描き入れようとしなかったことに留意すべきだ。

引き続き、清代輿図について見てみよう。羅洪先の『広輿図』を「長沙」「石塘」を記した明代輿図の祖本とすれば、清代のそれが陳倫炯の『海国聞見録』と言ってよい。1730年に刻印されたこの地理書の巻下には、「四海総図」「沿海全図」「台湾」「台湾後山図」「澎

湖図」「瓊州図」といった見取り図があり、「四海総図」には「南澳気」「沙頭」「長沙」「石塘」「七州洋」の図形が見える[9]。中国論客は、「気」「沙頭」を東沙群島、「長沙」を中沙群島、「石塘」を南沙群島、「七州洋」を西沙群島及び周辺海域に都合よく当て嵌めた上、「南海諸島が悉く清朝の支配下に入ったことの証だ」と断言する。ところが、肝心な「沿海全図」「瓊州図」を見ると、「気」「沙頭」「長沙」「石塘」「七州洋」が悉く抜け落ちており、「固有領土」説が一気に崩れてしまう。巻上「南澳気」の文中、「南澳気」「萬里長沙頭」「長沙門」「萬里長沙」「千里石塘」に関する記述があるものの、文脈から「中国往南洋者」の航路、標識島の位置・環境を説いていることが分かる。要するに領土認識と無関係だ。

また、西洋製海図の模写図として、福建水師提督施世驃の「東洋南洋海道図」（1721）と閩浙総督覚羅満保の「西南洋各番針路方向図」（同）の二種が現存するが、いずれも南太平洋・南シナ海・インド洋の海域を張り巡らした航路・港・暗礁を示したもので、周辺国の島や港に漢字地名を付している。西洋製海図でお馴染みの長刀形図形も描かれており、横に「気」「長沙」「石塘」といった名称が見られるが、帰属について何も示していない[10]。

『海国聞見録』の「四海総図」をベースに、「気」「沙頭」「長沙」「石塘」「七州洋」を描いた清代輿図を拾い上げると、「輿地全図」（佚名、1799）、「三才一貫図」（呂撫、1722）、「環海全図」（佚名、1787）、「京板天文全図」（馬俊良、1796）、「地球圓図」（六厳、1834）、「七省沿海全図」（邵廷烈、1866）、「環海全図」（金保彛、1881）などがあり、どれも似通っている[11]。一方、「長沙」「石塘」を記さない地図の方が圧倒的に多く、羅列すると、「広東輿図」（佚名、清初）、「広東沿海図」（佚名、1653）、「七省沿海図」（佚名、1787）、「明地理図」（六厳、1822）、「皇輿全図」（鄒伯奇、1844）、「広東総図」（佚名、1866）、「広東全省輿地総図」「広東全省経緯度図」（1897）、「大清廿三省輿地全図」（佚名、1894）、「皇朝壹統図」「亜細亜図」（輿地学会、1903）、「大清帝国」（商務印書館、1905）等々。

思えば、歴代王朝の版図・領土を確認するには、学者個人の著書・製図より、皇帝勅令を受けて製作された御製輿図ないし正史『一統志』『会典』所収の附図に拠るべきであろう。清代に限って言えば、康熙帝欽定『皇輿全覧図』（1718）、雍正帝欽定『皇輿全図』（1723）、乾隆帝欽定『大清一統輿図』（1761）の三種があり、いずれもイエズス会士の助力を得、年月をかけた実地測量のデータに基づいて精製された全国地図である[12]。従って完成度が高く、自国の領土なら記入漏れはあり得ない。清朝の版図を示す確たる証拠のはずだが、三図とも南海諸島・尖閣諸島の影も形もない。

また、明清一統志の各巻に輿図が収録され、「普天之下、莫非王土」と誇示している。『大明一統志』（1461）の中に「大明一統之図」「広東地理之図」があり、「瓊州府」が見えるが、南海諸島は図面に含まれていない。「広東地理之図」の枠に「……東南抵大海、南抵大海、西南抵大海」と広東省の四境を示している[13]。『乾隆大清一統志』（1784）には「皇輿図」「広東統部図」「瓊州府図」を載せているが、南海諸島は見当たらない[14]。『嘉慶重修一統志』（1843）収録の「皇輿全図」「広東全図」「瓊州府図」を見ると、地名の表記が乾隆版より詳しくなったが、相変わらず「千里長沙」「萬里石塘」は欠如している[15]。

なお、歴代王朝の行政法規をまとめた法典集『会典』を繙けば、行政区や疆域に関する規定・記載・附図を見ることができる。『正徳大明会典』（1511 年）は何故か附図が欠如しているが、巻十八「広東等処承宣布政使司」と「瓊州府」の条で、広東省瓊州府に所属する州県の名称・四境を羅列しており、南海諸島関連の記載は全くない[16]。一方、『欽定大

清会典』（1758年）では、巻八「戸部疆理」条に広東省及び瓊州府の州県名と四境を明記しており、巻六十三「兵部職方清吏司」条に「皇清一統輿地全図」と「広東全図」が見られ、両図とも国土の最南端は海南島までとなっている(17)。清代一統志・会典の附図は康熙・雍正・乾隆三代の欽定輿図を模したもので、「千里長沙」「萬里石塘」といった正体不明の無人島を載せないのも不思議ではない。金光祖の『広東通志』（1697）や明誼の『瓊州府志』（1841）など、『瓊管志』から「千里長沙」「萬里石塘」の記述を孫引きした地方志が数種見られるものの、輿図に「長沙」「石塘」を描き入れた地方志は存在しない。

ところで、オックスフォード大学 Bodleian Library 所蔵の明代絵図 The Selden Map of China における「長沙」「石塘」の描き方は頗る興味深い。漳洲・泉州を起点とする航路の線が南へ延び、途中で枝分かれし、ベトナム広南・尖筆羅・新州の東の海上に差し掛かった場所に「萬里長沙　似船帆様」「嶼紅色」「萬里石塘」と記した傾いた長方形が見え、位置から西沙諸島ではないかと推測される。製作年代について、明朝の海禁が解かれた隆慶元年（1567）以後の作品で、日本・琉球・東南アジア・インド洋へとつながる航路を克明に描いた商用航海図のようだ。「皇明」云々の標題はなく、南洋諸国・島嶼も中国と同一縮尺で山水画風に仕上げられ、上で見てきた「華夷」を峻別する輿図と一線を画する(18)。

二、民国期地図における南海諸島表記の変容

南海諸島が「長沙」「石塘」などの古称ではなく、「東沙」「西沙」「南沙」「団沙」といった名称で中国地図に登場したのは、清朝が滅び、中華民国が建国した後のことだ。四つ揃って一遍に現れたのではなく、民国政府が1947年12月1日に南シナ海全域をカバーする「十一段線」を引いた『南海諸島位置図』を公布するまで、順次に登場してきたのである。以下、民国期における南海諸島表記の変容を辿りながら、認識の変化を探ってみよう。

先ず、民国二年（1913）刊行の中学堂・師範学堂用『中国地理教科書』を取り上げる。巻一「地文地理」の「二、沿海岸線」条に「（丁）南海之沿岸」、巻三「地方志三」の「広東省」条に「瓊州府」「崖州直隷州」の項目があるが、南海諸島への言及は全くない。それより、巻一「中国総論」の「幅員」条を見ると、中華民国領域として「南起北緯18度13分、以瓊州島之崖州海岸為極端」と明記している(19)。翌年に遠東地理協会が発行した「中華全図　MAP OF CHINA」では、海南島の挿し込み図「海南」があるが、そこには南海諸島は見当たらない(20)。民国四年（1915）刊行の「中国鉄路現勢地図」も同様で、挿し込み図「瓊崖道」を載せているものの、南海諸島の表記を欠いている。別の挿し込み図「欧亜連絡鉄路線路略図」では「台湾」「瓊州」の南の海上に「南海」と記入しているだけだ(21)。

ところで、民国六年（1917）刊行の陳鎬基編『中国新輿図』を調べると、第一図「中国地勢図」には東沙島の図形が見られる。第二図「中国政区図」では、東沙島の図形に「布拉達斯島」と名付けられ、英語名 Pratas の音訳だ。ただ、第二十一図「広東省」の挿し込み図「瓊州道」を見ると、東沙島の表記は欠如している(22)。一方、童世亨著『中華民国新区域図』と言えば、当時では権威ある地図帳だったらしい。1917年第四版を見ると、巻頭「中華民国全図」には「東沙島」に加え、挿し込み図「海南島」には「西沙群島」「特里屯島」の表記が現れた。「特里屯島」とは西沙諸島の中建島の英語名 Triton I.の音訳である。「広東省図」及び附図「瓊州道」には東沙諸島・西沙諸島が表記されず、左下端の注記に「東沙島及西沙群島之位置名称俱見総図、茲不備載」とある(23)。こうして、民国初期（1910

年代）発行の地図において、南シナ海の四つの諸島のうち、確実に描かれた島と言えば東沙諸島のみで、西沙諸島は多少なりとも一部が顔を覗かせる程度に過ぎず、南沙諸島に至っては、存在すら知らない島だったことをうかがわせる。

民国初期の地理書・地図において、このような表記法を施したのは訳がある。1907 年、大阪商人西沢吉治が百人規模の開拓団を率いて東沙島を占拠し、鳥糞・燐肥・水産資源の開発に着手した。この係争を巡って、両広総督張人駿が広州駐在日本領事館と折衝した結果、1909 年 10 月 11 日に漸く和解にこぎ着けた。中国側から補償金 16 万元を受け取ることを条件に、西沢開拓団が撤退し、東沙島の支配権は名実とも清朝に引き渡されることになった。南海諸島の領有権を意識し始めた中国当局が漸く一歩を踏み出した感じを受けるが、問題は、日本側から東沙島の中国帰属の証拠材料を見せてほしいと迫られた時の張人駿の困窮ぶりである。彼の自供によると、「我国輿地学詳於陸而略於海、偏於考拠方向遠近、向少実在測量記載、多渉疎漏。沿海島嶼、往々只有土名、而未詳記図志。欲指天度与言、旧書無考。所恃者仍是英国海図」という(24)。彼の言う「英国海図」とは、後述する陳壽彭訳『中国江海険要図志』である。こうして見れば、前記の『中国地理教科書』に東沙島の記載すら欠如したのは無理もない。清末民初、中国当局が東沙島や西沙諸島の開発に意欲を示したものの、あえなく頓挫し、西沙諸島・南沙諸島で日本人開拓団による開発・経営、インドシナ半島を植民化したフランス軍の断続的な上陸・占拠が相次ぎ、中国による実効支配というには程遠い。陳鎬基の『中国新輿図』に東沙島しか載っていないことは、こうした実情・実態の反映と言えよう。

時代が下り、1920～30 年代に発行された中国地図の中で、東沙・西沙を描いたものがかなり増えている半面、中沙・南沙を描いたものは極めて稀だった。民国十二年（1923）刊行の『瓊州府志』には「海南島及西沙群島在南中国海位置図」があり、西沙諸島を中心に「中国海」の島嶼座標が記されている(25)。民国十五年（1926）刊行の洪懋熙著『最新中華形勢一覧図』を繙くと、「中華民国全図」と「粤江流域図」では、「東沙群島」「西沙群島」及び「特里屯島」「北礁」が記入され、「中華民国全図」の附説「中華民国・位置疆界」条に「……南起北緯十五度四十六分、當広東省南西沙群島南端之特里屯島（即土莱塘）」と明記している(26)。また「広東省図」では、「東沙群島（布拉多斯島）」の表記に加え、「西沙群島全図」も添付しており、十数の島嶼の図形と名称を掲載している。更に附説「広東省・地文地理・海岸」条には「西沙群島（即七洲洋）遠懸海南、為我国最南之疆土。……東沙群島富有燐鉱、日人西沢曾窃據而経営之。清末幾経交渉、償銀十余万両、始克帰還」と記す(27)。一方、「沿海形勢図」にある「海疆変遷大勢図」を見ると、庫頁島（サハリン）から琉球や台湾を経てインドシナ半島・マレー半島まで囲い込むように、「前清極盛時代中国領海界」と名付けたレットラインが引かれているが、圏内には南海諸島がぽっかり抜け落ちている。「沿海形勢・総論」の「海疆変遷」「海岸区画」条においても、南海諸島への言及は欠如している(28)。洪懋熙地図のこのような描き方が後で仇になった。1933 年 7 月、フランス軍が南沙諸島の太平島・南威島・中業島など九つの島を占領する事件が起きた際、抗議する民国外交部の職員に対し、駐華フランス大使館秘書 Bande が洪懋熙著『最新世界形勢一覧図』（民国十六年五月出版）を持ち出して、「ここに『中国疆界至西沙群島之 Triton（土莱塘島）』と書いているのではないか」と問い詰めたという(29)。

1930 年代後半に入って、南沙諸島の存在も次第に知られるようになった。民国二十年

（1931）発行の亜新地学社製作「中華国恥地図」に「東沙島」「西沙群島」が見え、挿し込み図「亜洲各国形勢図」には「西沙群島」「南海群」が印字されている(30)。上海申報館が民国二十二年（1933）に初版発行した『中国分省新図』では、「政治区域図」「地形総図」「交通総図」三図ともに「東沙群島」「西沙群島」を記している。ただ、「西沙群島」が欄外に食み出しており、南シナ海全域までは含まれていない。「広東」の挿し込み図として、「海南島」の他に「東沙島」「西沙群島」も掲載され、後者には「北礁」「樹島」「石島」「林肯島」「覓出礁」「土莱塘島」など十数の島名と図形が描かれている(31)。英語名の訳が殆どだが、中国人の西沙諸島に対する認識が深まったことが窺える。同年九月刊行の『中国歴代疆域戦争合図』を見ると、第四十五「中華民国政治区劃図」では、東沙諸島の他に附図「西沙群島」があり、「北礁」「鶯非士莱塘列島」「林肯島」「銭財島」「土莱塘島」の図形・島名が見られる。又四十五「民国軍統一戦事図」は東沙諸島の表記に止まる(32)。

一方、商務印書館や申報館などの老舗出版社が発行した地図と一味違った地図も数種見られ、一顧の値がある。戦前、上海徐家匯で孤児救済・教育に尽力したフランス人イエズス会士の周儒望（Rene' Jouon,S.J.）が編集した『Geographie de la Chine 中華地理』は、フランス語で編集された中国年鑑であり、多種のカラー地図を収録している。手元にある1932年版と1937年版を調べると、BORNES DE LA CHINE（中国境界）やKOANGTONG（広東）には南海諸島の表記が見られないが、巻末地図LES INDES NEERLANDAISES（中国於荷属印度之商業）において、MER DE CHINE（中国海）と記した海上にPratasとParacelsが描かれている(33)。言うまでもなく、周儒望がこの二島を中国領と思って書き込んだわけではない。また、1935年にシンガポールで発行された「商用南洋群島全図」は、東南アジア各地の物産を詳記した商用地図であり、「南中国海（SOUTH CHINA SEA）」と「西沙群島（PARACEL Is）」の表記が見える(34)。

1935年1月、民国政府内政部水陸地図審査委員会が『南海諸島中英地名対照表』を制定し、4月に『中国南海各島嶼図』を発行した。今回「東沙群島」「西沙群島」「南沙群島」（現在の中沙諸島）「団沙群島」（現在の南沙諸島）を引っ括めて、132の島名（最南端に北緯4度の曾姆灘・James Shoalと記す）を公表したため、南シナ海全域の領有意向を示した初の公文書と見てよい。これを受けて翌年8月、地理学者白眉初が『中華建設新図』（北平建設図書館）を出版したが、第二図「海疆南展後之中国全図」には四群島と曾姆灘を囲い込むようなU字ラインが引かれ、後の「十一段線」の雛型と言われている(35)。1936年1月刊の『中国地理沿革図』は、歴史地理教科用の地図帳だが、南沙諸島を描いた早期地図集の一冊として注目に値する。第一百図「民国分道図」と末図「現時政治区劃図」では、「東沙島」の他、挿し込み図には「西沙群島」「南沙群島（Maccles-field Bank）」「団沙群島（珊瑚群島）」の表記も見られ、うちの数島に英語名を付しており、「法占九小島原属中国」との添え書きも読み取れる。更に第九十一図「清季疆域及四隣図」において、「領海界」と名付けたU字型ラインが南海諸島全域をカバーするように引かれている(36)。また1941年2月、上海亜光輿地学社から各省分県詳図シリーズが発行されたが、「広東分県詳図」を見ると、挿し込み図「南海諸島図」には「東沙島」「西沙群島」「南沙群島」「団沙群島」の表記の他、それぞれの小島の名称・図形も表している(37)。

1937年に日中戦争が勃発し、南海諸島が相次いで日本軍によって攻略、占領された。更に仏印進駐や太平洋戦争が始まると、南シナ海全域は日本軍の支配下に置かれてしまい、

「新南群島」と改名された。戦後、日本軍が引き揚げるとパワーの空白が生じ、中華民国政府が 1946 年 10～12 月に軍艦 4 隻を派遣して南海諸島の接収に乗り出し、太平島に進駐する。その後、海南行政特別区への編入など一連の調査・準備を経て、1947 年 12 月 1 日、内政部方域司が『南海諸島新旧名称対照表』『南海諸島位置図』を公布し、南シナ海全域をカバーする「十一段線」を引いた地図を発行した。この際、南沙諸島の正式名称として「団沙群島」を廃止し、それまで中沙諸島を指し示す「南沙群島」を使用することにした。

当局の方針転換を受け、上海申報館が 1948 年 7 月に『中国分省新図　戦後訂正第五版』を発行し、南海諸島表記の大幅改訂を行った。「欧亜地形総図」「政治区域図」「地形総図」「広東」の四図では、東沙・西沙・中沙・南沙の四群島が破線で囲まれ、内側の最南端に「曾母沙」「曾母暗沙」と記す。「広東」には「東沙島」の他、「南沙群島」「西沙群島・中沙群島」の附図も掲載され、前者には「太平島」「中業島」「南威島」「永暑礁」など三十余りの島嶼、後者には「北礁」「永楽群島」「中建島」など十数の島嶼が描かれ、英語訳名がすべて中国名に書き換えられた(38)。地図集の裏表紙に「内政部地図発行許可証」の印字があり、編纂者丁文江（元中央研究院総幹事）、翁文灝（後の行政院長）、曾世英（著名な製図家）という錚々たる顔ぶれを見れば、歴とした官製地図集であることが分かる。後に大陸・台湾・香港で発行された中国地図では、南海諸島の挿し込み図が定番となり、「十一段線」も共産党政権に引き継がれ、1953 年に「九段線」と改められた。

さて、領有権を主張するに当たり、中国当局は決まって「古より我が国固有の領土」という常套句を使う。しかし、戦前の地図・地理書を見れば分かるように、当時において、西沙諸島を以って自国領の最南端と見做すのが一般的だった。1928 年 5 月、広東省政府の企画で、中山大学教授沈鵬飛ら専門家グループが西沙諸島の現地調査を行い、報告書に「南極島一作特里屯島、又訳的利東島、又名土莱塘島。我国以此島為版図最南之点、因名為南極島」と記す(39)。この調査結果を踏まえ、広東省政府主席陳銘枢総纂『民国海南島志』（1933 年）は、「西沙群島……距海南榆林港東南一百四十五里。為我国最南之領土。……其実際上経営者、則為日本人所組織之南興実業公司。……日人之経営西沙群島、蓋前後凡九年也」と書いている(40)。また、1927 年頃に出版された『新時代高級小学地理教科書』第一冊「八、海南島在南海的地位」一節を見ると、「広東沿海……有大東沙島、……従前曾給日本人窃據、経過許多交渉、纔得収回。……海南島的東南有西沙群島、旧称七州洋……南端的特里屯島、算是我国最南的国界」と明記している(41)。ともあれ、中国地図の上で南海諸島の表記や線引きが今日の形になったのは、戦後になってからのことである。

三、西洋製アジア地図に見る南海諸島

翻って、西洋製アジア地図に目を転じると、近世ヨーロッパ人による「アジア発見」の足跡を辿りながら、南海諸島の幻を探し求める知的旅になろう。周知のように、マルコ・ポーロ（Malco Polo、1254～1324）『東方見聞録』の流布により、Serica（絹の国）・Iapan（黄金の国）の噂が 14 世紀初頭のヨーロッパ社会に伝えられ、早くも 15 世紀製作の世界地図にその姿が現れた。『東方見聞録』に拠って描かれた想像図として、1459 年にベネチアの修道士フラ・マウロ（Fra Mauro）が描いた世界図と、1492 年にリスボン在住のドイツ人貿易商マルチン・ベハイム（Martin Behaim）が作った地球儀が挙げられる。前者には Catayo（中国）と Cimpagu（シンパグ）、後者には CATHAJA（中国北部）や Mangi

（中国南部）と Cipango（ジパング）の図形・表記がすでに登場しているが、当時未知だった太平洋や南シナ海はもちろん示されておらず、当然ながら南海諸島の影も形もない。

折しも大航海時代の黎明期と重なり、コロンブスの新大陸発見（1492～1502）やマゼランの世界周航（1519～1522）を先駆に、やがてポルトガル・スペイン・オランダ・フランス・イギリス……「南蛮人渡来」「紅毛人来航」が始まる。ポルトガル船隊が 1511 年にマラッカを占拠し、翌年香料諸島モルッカに到着し、数年後、中国南部の海岸に姿を現した。遂に 1543 年 8 月 25 日、三人のポルトガル商人を乗せた中国船が種子島に漂着し、鉄砲を伝えた。この一連の出来事は、アジア航路の開通とともに東アジア陸地・海域の地理探検を意味し、その後、フランシスコ・ザビエルやマテオ・リッチらイエズス会士の渡来が相次ぎ、インド・中国・日本の関連情報がどんどんヨーロッパに送られていく。西洋人探検家が未知の土地や新航路を求めて世界各地に進出するにつれ、ヨーロッパ人の地理知識は一躍全世界にまで拡大し、世界地図の需要が急増した。16 世紀、銅板製図の勃興と相まって、ベネチア、リスボン、アントワープなど各地で地図の製作・出版業が繁栄期を迎える。

航海士や探検家から得た情報に基づき、最初ヨーロッパ製地図・海図に描き込まれたアジアの島と言えば、JAVA（ジャワ）・BORNEO（ボルネオ）・MOLVCCAE（モルッカ）といった香料の産地だった。インド航路の発見を示すカンティノの「世界図」（1502 年）を見ると、長大なマレー半島の東方に Oceanus orientalis（東方の海洋）表記が見えるが、洋上は空白のままだ。ところが 16 世紀半ば頃、ヨーロッパ人が作ったアジア地図には、南シナ海の位置に点状の島嶼群を表す長刀形に I.de Pracel と名付けられた図柄が現れた。早期作品として、佚名「ポルトガル製世界図」(1545～1550)[42]、ローポ・オーメン「世界図」(1554)[43]、ディオゴ・オーメン「アジア図」(1558)[44]、バルトロメウ・ヴェリュ「世界図」（1561）[45]、ラザロ・ルイス「東亜図」（1563）[46]、佚名「東亜図」(1568)[47]、フェルナン・ファズ・ドウラード「東亜図」(1573)[48]などが現存し、うちの数点に J.do pracel の名が読み取れる。投影法を考案し、近世ヨーロッパを代表する地理学者の一人と目されるメルカトールの「世界図」（1569）では、長刀形図柄の横に Baixos de Chapar と記されている[49]。その他、佚名「東アジア図」（1560）[50]、バルトロメ・デ・オリーヴェス「東亜図」（1582）[51]、ヨアン・マルチネス「アジア図」（1582）[52]の三図とも illa de apiasey が辛うじて読み得る。コルネリス・ドエッツ「アジア図」（1598）にも I.de Pracel 表記が見られ[53]、同時代の Dutch Chart（オランダ海図）なら、どれも似たり寄ったりだ。

Pracel（英語の綴り Paracel）の語源について、「岩礁」「暗礁」を意味するポルトガル語に由来する説もあり、当初、漠然と危険水域を示す名称だったようだ。早期製図家の使う Pracel が具体的にどこの島を指していたかは不明だが、位置から見ればベトナム海岸に甚だ接近している。1570 年、アムステルダムの製図家オルテリウスが世界初の近代的地図帳『地球の舞台』を出版し、中に「世界図」「アジア図」「東インド図」を収録しているが、三図とも南シナ海・南海諸島の表記は見られない[54]。1584 年の改訂版に CHINAE が追加され、ヨーロッパの地図帳に現れた最初の中国地図となるが、SINVS MAGNVS（シナ海）の南端に Pracel ins.と名付けた長刀形の島嶼群が描かれている[55]。また、オランダ人旅行家リンスホーテン著『東方案内記』所収の「東アジア図」（1596）にも I.de Pracel の図形がくっきりと見える[56]。ペトルス・プランシウスの INSVL AE MOLVCCAE（1598）やコルネリスの ASIA, PARTIVM ORBIS MAXIMA（1593）も同様だ[57]。その後、彗星の

尾のように南に伸びる線影を帯びるこの長刀形は、南シナ海の島嶼を表す記号となる。

17 世紀に入って、新興国オランダが海洋進出に乗り出し、やがてポルトガル・スペインに取って代わって東洋貿易を制覇する。間もなく、フランスやイギリスも海上権益の争奪戦に参入し、植民地の奪い合いを巡って鎬を削る。こうした中、イギリス東インド会社（1600 年）やオランダ東インド会社（1602 年）が創設され、お抱えの製図技師によってアジア地図・海図が量産されるようになった。1662 年、オランダ東インド会社製図技師のヨアン・ブラウは、『世界地図』を刊行し、世界最大のアトラスとの名声を博した。中の「世界図」「アジア全図」「東インド」三図を見ると、長刀形の島嶼群が描かれ、上端に EI.Pracel の名称が読み取れる(58)。一方、ジョン・セラーの『海図帳』（1670）はイギリス最古の海図帳の一つで、うちの A Chart of the EASTRMOST part of the EAST INDIES を見ると、AYNAM（海南島）の南に Id Pracel と名付けた長刀形が見え、ベトナム海岸に近寄っている(59)。17～18 世紀、アジア地図に南海諸島を記したものが増え、Vicenzo Coronelli の Asia Orientale（1690）然り(60)、J.B.Nolin の L'ASIE（1704）然り(61)。19 世紀に入ると、欧米列強が相次いで軍艦を派遣して南シナ海の測量を始めた。

ところで、Pracel に比べて Pratas の表記は却って出遅れた。一般に、1866 年に航海中、東沙諸島に避難したイギリス人航海士 Pratas に因んで名付けられたものと言われているが、オランダ東インド会社の製図技師を務めるヘッセル・ゲーリッツが作った Pacific Ocean（1622 年）には、すでに I de prata の図形が現れた(62)。イタリア人イエズス会士の Martion Martini（衛匡国）が 1655 年に刊行した Imperii Sinarvm Nova Descriptio においても、I.Formosa（台湾）の南に I.Prata の島影が見える(63)。また、ヨアン・ブラウの父親ウィレム・ブラウが 1650 年に製作した「中国図」及び「中国日本近傍図」にも、I.Formosa と HAINAN（海南島）の間に I.Prata が描かれ、「中国日本近傍図」には EI.Pracel を付した長刀形の島嶼群も表記されている(64)。更に 1798 年にパリで出版されたフランス人探検家ラ・ペルーズ著『世界周航記』の附図「東アジア探検全図」を見ると、L.FORMOSE の西南海上に R.de. Prata 島があり、位置から見て東沙諸島であるに違いない(65)。留意すべきは、Pracel と Prata を記さない地図・海図も多数存在しているし、似たような長刀形の図柄は西太平洋にもインド洋にも散見される。Pracel・Prata の表記があっても、帰属注記（例えば Islas de Chine：中国島嶼）を付したものは皆無に等しい。

19 世紀以降、欧米諸国が南シナ海の調査・測量を頻繁に実施した結果、精密な近代地図が量産され、南海諸島の表記も次第に長刀形パターンから脱却し、島ごとにリアルに描かれるようになった。1831 年にロンドンで発行された CHINA AND JAPAN では、CHINESE SEA の海上に Pratas I.& Shoal と Paracels の図形が見られ、後者の上端に N.Shoal と Tree l.の表記も見える(66)。Shoal とは砂洲の意味で、 N.Shoal は北礁、Tree l. は樹島をそれぞれ指し示している。同年代のパリで発行された CHINE ET JAPON を見ると、MER DE CHINE（中国海）の海上に Pratas が見える半面、Paracels が欠落している(67)。ベルリンで発行されたアジア地図で、Heinrich Kiepert の ASIEN（1860）と Julius Ludwig Grimm の Karte von Hoch-Asien（1833）があり、前者は L.Hainan（海南島）の南に Paracels Iⁿ.を描いたのに対し、後者は Pratas を記している(68)。1868 年、英国海軍水路部がいち早く南シナ海の調査測量報告書『CHINA SEA DIRECTORY』を出版した。1901 年、陳寿彭がその第 3 版を翻訳し、『中国江海険要図誌』として上海経世文社から刊

行する。巻一の第二図「中国海濱及長江一帯下至中国海南洋群島」には、「蒲拉他士」「怕母拉西尔列島」「鶯非士莱特列島」「馬恰力士非尔特灘」など東沙諸島・西沙諸島・中沙諸島の英語訳名を記し、第四十一図「蒲勒他士島」も載っている(69)。補編巻一「南海」では、「怕母拉西尔列島」「士莱塘島」「庫勒生特列島」「鶯非士莱特列島」「馬恰力士非尔特灘」など西沙諸島 27 の島嶼の概況・解説を掲載している(70)。19 世紀西洋製アジア地図において、東沙諸島と西沙諸島の表記が一般的となったが、南沙諸島は未だ登場してこない。

20 世紀欧米各国で発行されたアジア地図を見ると、South China Sea の表記は定着し、Spratly の表記も一部現れた。ただし、帰属を示唆する注記は一筋縄では行かない。以下、代表作を幾つか取り上げてみよう。1900 年刊の BACON's New Large-Print MAP OF CHINA には Pratas だけが描かれているのに対し(71)、1901 年刊の MAP OF ASIA において、PARACEL IS. AND REEFS、MACCLESFIELD BANK（中沙諸島）、WALES BANK（南沙諸島の広雅灘）が表記されている(72)。1926 年刊の PHILIPS'NEW SYSTEMATIC ATLAS の THE FAR EAST では、Pratas、Paracels Reefs、Truro（中沙諸島の憲法暗礁）、Spratley、Amboyna（安波那島ないし安波砂洲）が描かれているが、Spratley と Amboyna 名称の後に（Brit.）が付き、イギリス領であることを示している。また、ASIA POLITICAL に描かれた Spratley と Amboyna にもそれぞれ（Br.）注記が付いている(73)。1934 年刊の PHILIPS'CENTENARY HANDY GENERAL ATLAS OF THE WORLD を見ると、ASIA- PHYSICAL と ASIA- GENERAL 両図とも、Paracel Is、Spratley I、Amboiyna I の三島を記しているが、ASIA-GENERAL の名称に（Br.）が付く。また、EAST INDIES でも、南沙諸島の図形が幾つか描かれており、うち南威島に Storm I.（Spratley Br.）、安波那島に Amboyna（Br.）と記す。それと対照的に、CHINA の挿し込み図 Hainan では、南海諸島は欠落している(74)。一方、THE WORLD（Rand, McNally & Co.'s Chicage,1914.）や、HAMMOND'S NEW SUPREME ILLUSTRATED ATLAS of the WORLD（New York,1939.）など、South China Sea に南海諸島の表記が見られない地図も少なくない。

1944 年刊行の The World は、第二次世界大戦中アメリカで発行された軍用地図であり、South China Sea に Paracel Is 及び南沙諸島の幾つかの島影が見えるが、帰属表示はない(75)。1956 年刊の Rand McNally Pocket WORLD ATLAS は、INDONESIA AND THE PHILIPPINES に PARACEL ISLANDS AND REEFS、TIZARD BANK AND REEFS（鄭和島・堤閘灘）、SPRATLY I.の三島を記している(76)。HAMMOND'S WORLD ATLAS（1951 版・1963 年版）は、世界地図や時事写真をふんだん盛り込んだ百科全書式のアトラスであるが、西沙諸島の中国領有を記した早期地図集の一つとして注目に値する。EAST INDIA ISLANDS を見ると、SOUTH CHINA SEA と記した海上に Paracel Is.（China）や Spratly I.を記し、BURMA,SIAM,INDOCHINA においても、Paracel Is.and Reefs（China）の記入法が見える(77)。また、1964 年刊の GOODE'S WORLD ATLAS も、CHINA・EASTERN には PRATAS と中国語読みの HSISHA CHUNTAO（PARCEL IS.）（China）、INDONESIA AND THE PHILIPPINES には中国語読みの HSISHA CHUNTAO（China）と SPRATLY を併記している(78)。さらに、1965 年刊の POLITICAL HANDBOOK AND ATLAS OF THE WORLD を見ると、Pratas I.（Tungsha）、Paracel Is.（China）と記している(79)。これらと対照的に、1964 年刊の ATLAS OF SOUTH EAST ASIA では、SOUTH EAST ASIA にある SOUTH CHINA SEA の海上が空白のままで、海上境界線が Natuna Is をイ

ンドネシア側に囲み込むように引かれている。また、INDONESIA には Paracel Is.が辛うじて見えるが、帰属の表記は何もない(80)。

1970 年代に英米で発行された世界地図を概観すると、東沙諸島と西沙諸島に「中国領」の注記を付けた地図が確実に増えた一方、南沙諸島の帰属は依然として不明のままである。Premier World Atlas の 1967 年版と 1976 年版を照合すると、INDONESIA AND THE PHLIPPINES において、PARACEL ISLANDS AND REEFS、TIZARD BANK AND REEFS、SPRETLY.I の三島を記しているが、帰属の表記はない(81)。Philip's Pocket Atlas of the World の 1970 年版では、EAST INDIES に Pratas（China）、Paracel l.s（S.Vietnam）、Spratly I と表記している(82)。The Times' Concise Atlas of the World（Times Newspapers）の 1972 年版は南海諸島の表記がなく、1978 年版も Tung-sha Tao（Pratas）表記のみだ(83)。1973 年刊の Webster's ATLAS and zip code directory には、Pratas I.（Tungsha）、PARACEL IS.（China）のような表記法が見える(84)。1975 年刊の The Times Atlas of the World は、EURASIA 16 に南海諸島の形状を幾らか描いただけで、島名は欠如している。CHINA AND WEST PACIFIC 17 を見ると、Paracel l.s、Spratly を記している(85)。1974 年刊の The Times Atlas of China は、特集 South China Sea Islands を掲載し、PRATAS ISLANDS（Tung-sha Chun-tao）、PARACEL ISLANDS（His-sha Chun-tao）、MACCLESFIELD BANK（Chung-sha Chun-tao）、SPRATLY ISLANDS（Nan-sha Chun-tao）と、中国語読みも併記している。更に解説文で、東沙諸島について「Chinese possession of these islands is uncontested.」と説き、西沙・南沙両諸島について「they are also claimed by South Vietnam.」とコメントが付く(86)。最後に、Philips' CONCORDE WORLD ATLAS の 1976 年版は Tungsha Tao（Pratas）と Hsisha Chuntao(87)、Goode's World Atlas の 1978 年版は PRATAS（China）と HSISHA CHUNTAO（PARACEL IS.）（China）(88)、そして、The New Penguin World Atlas の 1979 年版は Paracel Is.（China）をそれぞれ表記していることを附記しておきたい(89)。

欧米製アジア地図のこうした表記変化は、南シナ海における勢力図の変化を反映していると言えよう。1974 年 1 月、西沙諸島の永楽群島を巡って中国軍が南ベトナム軍と激突し、勢い西沙諸島全域を制圧してしまった。更に 1988 年 3 月、中国軍は南沙諸島の赤瓜礁でベトナム軍と交戦した末、数個の岩礁を占拠した。これによって、中国が南沙諸島で足場を獲得し、後の人工島造成の伏線となる。以降、各国のアジア地図では実効支配の既成事実を伝えるような表記法が一般的となったが、東沙諸島に「TUNGSHA TAO、Pratas Islands（Tai）」、西沙諸島に「XISHA QUNDAO、Paracel Islands（China）」、南沙諸島の Loaito.I（南鑰島）や SinCown.I、（景宏島）に「Palawan Islands（Philippines）と、英語名及び占拠国の名前を併記するのが主流で、南沙諸島全域の領有を示唆するような国名表記は未だ見られない。興味深いことに各種の地図帳において、CHINA に南シナ海の表記があっても、なぜか南海諸島は South-East Asia に描かれたケースが多い。

四、江戸古地図上の南海諸島――結びに代えて――

最後に、蛇足ながら日本の古地図にも一瞥を投げてみよう。南海諸島を描き表わした江戸時代の古地図は、種類が明清輿図より多く、清代輿図の模写図と、西洋製世界図の影響を受けた地図との二つに大別される。陳倫炯の「四海総図」に酷似している見取り図とし

て、「世界三国記」（活済堂刊、江戸後期）、「万国一覧図」（古屋野意春、1809）、「大清歴代人物旧地全図」（鈴木本栄、1858）などがあり、いずれも「万里長砂」か「万里石塘」の図形が描かれている(90)。それに対し、朱印船航海図系統の地図（屏風地図も含む）として、「旧大陸図」（江戸初期）、「世界図」（承応頃）、「世界図」（江戸初期）、「万国絵図」（江戸初期）、「航海古図」（江戸初期）、「東洋諸国航海図」（江戸初期）、「東亜航海図」（角屋旧蔵、江戸初期）、「東亜航海図」（清水孝男蔵、江戸初期）、「東亜航海図」（南波松太郎蔵、江戸中期）、「小加呂多」（江戸中期）、「東洋南洋航海古図」（江戸中期）などが現存し、例の長刀形図柄に「万里」「萬里長砂」「まんり」などの文字が付されている(91)。

また、マテオ・リッチの「坤輿万国全図」の模写図として、同名「坤輿万国全図」（江戸初期）、「世界図」（渋川春海、1698）、「輿地図」（原目貞清、1720）、「地球一覧図」（中根玄覧、1783）、「地球万国山海輿地全図説」（長久保赤水、1788）、「坤輿全図」（稲垣子戩、1802）などがあり、「万里長砂」と記した長刀形図柄が描かれている(92)。もっとも、マテオ・リッチの原図（宮城県図書館蔵）には見られない。一方、いわゆる蘭学系世界図のうち、『北槎聞略』の附図「亜細亜全図」（桂川甫周、1794）、「新製輿地全図」（箕作省吾、1847）、「万国地球全図」（栗原信晁、1850）、「万国地球分図」（近藤峴山、1856）を見てみると、「万里石塘」に振り仮名「プラセル」が付されている(93)。その他、「世界四大州図」（江戸後期）、「地球図」（司馬江漢、1792）、「円球万国地海全図」（石塚崔高、1802）、「新訂万国全図」（高橋景保、1810）、「新訂地球万国方図」（中島彭、1852）、「地球図」（大黒屋光太夫、18 世紀末）、「天線地方図」（森幸安、1752）など、「万里長砂」か「パラセル」と記した古地図が多数ある。南海諸島が江戸古地図に描かれていることは、17 世紀初頭、朱印船貿易で活躍した日本商人の船も南海諸島周辺の海域を往来していたことを窺わせる。

中外の古地図を一通り渉猟してきたところ、確実に言えるのは、南海諸島を表記しない地図も多数ある。件の長刀形図柄は南シナ海以外の海域にも散見され、もとより航海危険区域を示す標識であって、中国領有の証拠にはならない。古地図が歴史上の真実をすべて語ってくれた。

注

(1)例えば、中国外交部文件「中国対西沙群島和南沙群島的主権無可争辯」（『人民日報』1980 年 1 月 30 日）、韓振華主編『我国南海諸島史料彙編』（東方出版社、1988 年）、李国強著『南中国海研究：歴史与現状』（黒龍江教育出版社、2003 年）、呉鳳斌著「古地図記載南海諸島主権問題研究」（呂一燃主編『南海諸島：地理、歴史、主権』黒龍江教育出版社、2014 年）など、いずれも古地図資料を扱っている。『我国南海諸島史料彙編』では、「明至清代前期有関南海諸島地図的帰属画法」（84～99 頁）、「近代時期有関南海諸島帰属画法的地図資料」（309～365 頁）、「外国地図有関我国南海諸島主権帰属的画法」（614～669 頁）などの章節が設けられており、引用した古地図資料が膨大な量に上る。

(2)羅洪先『広輿図』、曹婉如等編『中国古代地図集・明代』文物出版社、1995 年。No.147「輿地総図」、No.152「広東総図」、No.155「東南海夷図」、No.156「西南海夷図」。

(3)章潢『図書編』台湾商務印書館、王雲五主持『四庫全書珍本』五集、巻五十一「東南海夷図」「西南海夷図」、巻二十九「四海華夷総図」、巻三十四「古今形勝之図」、巻四十一「広東図」「広東郡県図」。

(4)王圻・王思義『三才図会』上、上海古籍出版社、1985 年、93、95、138、190、418、419、518 頁。
(5)茅元儀『武備志』、古典研究会『和刻本明清資料集』第六集、汲古書院、昭和四十九年。2015、2168、2169、2282、2283、2321、2454、2455 頁。
(6)龍谷大学図書館蔵「混一疆理歴代国都之図」を見ると東シナ海に「萬里長沙」「西沙」「東沙」、南シナ海に「長沙」と二個の「石塘」がそれぞれ描かれている。https://da.library.ryukoku.ac.jp/view/130090/1
(7)方堃等編著『中国沿海疆域歴史図録』総巻下、黄山書社、2017 年、344 頁、316 頁。
(8)向達整理『中外交通史籍叢刊　鄭和航海図』中華書局、1961 年、40～41 頁。
(9)陳倫炯『海国聞見録』、前掲王雲五主持『四庫全書珍本』五集、102 頁。
(10)中国第一歴史档案館選遍『澳門歴史地図精選』華文出版社、2000 年、34 頁、38 頁。
(11)前掲『中国沿海疆域歴史図録』総巻下、302 頁、264 頁、276 頁、326 頁、387 頁、434 頁、471 頁。
(12)曹婉如等編『中国古代地図集・清代』文物出版社、1997 年。No.153『皇輿全覧図』、No.157『雍正十排図』、No.168『乾隆十三排図』。
(13)李賢等撰『大明一統志』三秦出版社、1990 年、（上）1 頁、（下）1256～1257 頁。
(14)『大清一統志五百巻』光緒辛丑秋上海寶善齊石印、巻一、巻三百三十八、巻三百五十。
(15)王雲五主編『嘉慶重修一統志』台湾商務印書館、1966 年、8 頁、5699 頁、5930 頁。
(16)山根幸夫解題『正徳大明会典』第一巻、汲古書院、1989 年、215～217 頁。
(17)『欽定大清会典』光緒已亥巧秋上海書局石印、巻八「戸部疆理」、巻六十三「兵部職方清吏司」。
(18)藤井美佐子訳『セルデンの中国地図』太田出版、2015 年。画像 https://seldenmap.bodleian.ox.ac.uk/
(19)屠寄編纂『中国地理教科書』（光緒三十一年 1905 年 3 月初版、民国元年校定）商務印書館、民国二年十一月十三版、「（丁）南海之沿岸」46～47 頁、「瓊州府」「崖州直隷州」144～145 頁、「幅員」24 頁。
(20)「中華全図 MAP OF CHINA」Eastern Geographical Establishment 製、上海商務印書館、1914 年。
(21)黎元洪題、張鴻藻著「中国鉄路現勢地図」中華書局発行・印刷、民国四年十一月十五日。
(22)陳鎬基著『中国新輿図』商務印書館、民国二年六月初版、六年六月三版。
(23)童世亨著『中華民国新区域図』商務印書館、民国四年六月初版、六年十月訂正四版。
(24)「張人駿復外務部東沙糸我国旧名有各種図記可証」、前掲『我国南海諸島史料彙編』、151 頁。実は、張人駿自身が監修した「広東全省輿地総図」（1897 年）にも東沙島の表記は存在しない。中国測絵科学研究院編纂『中華古地図珍品選集』哈爾賓地図出版社、1998 年、235 頁。
(25)瓊州海口海南書局「海南島及西沙群島在南中国海位置図」、『中国沿海疆域歴史図録』南海巻、163 頁。
(26)洪懋熙著『最新中華形勢一覧図』東方輿地学社印行、民国十五年七月初版、第一図「中華民国全図」、第六図「粤江流域図」、附説「中華民国」第一頁。
(27)同上、第二十二図「広東省図」、附図「西沙群島全図」、附説「広東省総論」第二十二頁。
(28)同上、第三図「沿海形勢図」、附図「海疆変遷大勢図」、附説「沿海形勢総論」第三頁。
(29)陳鴻瑜著『南海諸島主権與国際衝突』幼獅文化事業公司印行、民国七十六年、73 頁。
(30)亜新地学社「中華国恥地図」、前掲『中国沿海疆域歴史図録』総巻下、498～499 頁。1920～30 年代、「国恥地図」と銘打った地図の発行が流行っていた。総じて言えば、曾ての境界線として蒙古・サハリンから朝鮮・琉球・東南アジアまで、清朝の藩属・朝貢国を悉く取り囲む太い赤線が引かれているのが特徴だ。1933 年版の世界輿地学社印行『小学適用　本国新地図』の第 2 図「中華国恥図」では、「南海」に引かれた海上破線の内側に「東沙島」「西沙群島」のみ記しているが、1939 年版を見ると、「南沙群島」「団沙群島」が追加された。譚璐美著『中国国恥地図の謎を解く』新潮社、2021 年、口絵図版。
(31)丁文江、翁文灝、曾世英編纂『中国分省新図』上海申報館、民国二十三年二月再版、「政治区域図」1～

2 頁、「地形総図」3～4 頁、「交通総図」5～6 頁、「広東」25～26 頁。

(32)欧陽纓編製『中国歴代疆域戦争合図』亜新地学社、民国二十二年九月三版。

(33)周儒望主編『中華地理』上海徐家匯土山湾印書館、1932 年版、1937 年版、巻頭「中国境界」、「広東省」33 頁、「中国於荷属印度之商業」81 頁。

(34)安溪龔世昭絵製『商用南洋群島全図』新加坡南益印務公司、民国廿四年五月初版。

(35)白眉初編『中華建設新図』。デジタル資料画像：https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/67800?page=3

(36)蘇甲栄編纂『中国地理沿革図』日新輿地学社、民国二十五年一月訂正四版、「民国分道図」第二十九頁、「現時政治区劃図」第三十四頁、「清季疆域及四隣図」第二十七頁。

(37)黄鏡湖、盧懐遠編製『広東分県詳図』亜光輿地学社印行、民国三十年二月初版。

(38)丁文江、翁文灝、曾世英編纂『中国分省新図　戦後訂正第五版』上海申報館、民国三十七年七月。「欧亜地形総図」1～2 頁、「政治区域図」3～4 頁、「地形総図」5～6 頁、「広東」27～28 頁。

(39)「調査西沙群島之報告」、浦野起央著『南海諸島国際紛争史』刀水書房、1997 年、191～192 頁。

(40)陳銘枢修『民国海南島志』、『中国地方志集成　海南府県志輯』上海書店、2013 年、584 頁、589 頁。

(41)竹中憲一編『満州植民地中国人用教科書集成』8、緑蔭書房、2005 年、15～16 頁。

(42)松本賢一著『南蛮紅毛日本地図集成』鹿島出版会、1975 年、ANONYM. Portuguese Planisphere. 図版 VII。

(43)同上、LOPO HOMEM. Planisphere.図版 VIII。

(44)同上、DIOGO HOMEM. Asia.図版 XI、図版 XIII。

(45)同上、BARTOLOMEU VELHO. Planisphere.図版 XV。

(46)同上、LAZARO LUIZ. East Asia.図版 XVIII。名称表記 J.do prasel。

(47)同上、ANONYM.(F.V.Dourado). East Asia.図版 XX。名称表記 J:do prasel。

(48)同上、FERNAO VAZ DOURADO. East Asia.図版 XXI。名称表記 J:do prasel。

(49)同上、GERHARD MERCATOR. Planisphere.図版 XXIV、図版 XXV。

(50)同上、ANONYM.(in“Libro de Marinharia”). East Asia.図版 XXXIII。

(51)同上、BARTOLOME DE OLIVES. East Asia.図版 XXXIV。

(52)同上、JOAN MARTINES.Asia.図形 XXXIX。

(53)同上、CORNELIS DOETSZ.Asia.図形 XLVIII。

(54)オルテリウス『世界地図帳』臨川書店、1991 年、図版 1、図版 3、図版 48。

(55) Egom Klemp, *ASIA IN MAPS from Ancient Times to the mid-19th Century*: VCH,Acta Humaniora,1989. No.60「CHINAE」。原製図者：LUDOVICO GEORGIO。

(56)同上、N0.44「Itinerario」。

(57)チャールズ・ブリッカー著、矢守一彦訳『世界古地図』日本ブリタニカ 1981 年、123～124、127 頁。

(58)ジョン・ゴス著、小林章夫監訳『ブラウの世界地図－－17 世紀の世界』同朋舎出版、1992 年。「世界図」24～25 頁・口絵、「アジア全図」190～191 頁、「東インド」192～193 頁。

(59)前掲『世界古地図』、135～136 頁。

(60)秋岡武次郎編著『日本古地図集成』「欧州製日本図」鹿島研究出版会、昭和 46 年、No.78。

(61)『秋岡武次郎コレクション世界古地図集成』「世界古地図複製」河出書房新社、昭和 63 年、No.11。

(62)前掲『南蛮紅毛日本地図集成』、HESSEL GERRITSZ, Pacific Ocean.図版 LXIII。

(63)前掲 Egom Klemp, *ASIA IN MAPS*、No.61「Imperii Sinarvm nova descriptio」。

(64)前掲秋岡武次郎編著『日本古地図集成』「欧州製日本図」、No.75「Imperii sinarvn nova descriptio」、

No.74「China Veteribus Sinarum Regio nunc Incolis Tame dicta」。
(65)「東アジア探検全図」、織田武雄など著『日本古地図大成－－世界図編』講談社、1975 年、270 頁。
(66)Henry Teesdale, *CHINA AND JAPAN.*
(67)G.THOMAS,*CHINE ET JAPON.*
(68)前掲 Egom Klemp, *ASIA IN MAPS*、No.14「ASIEN」、No.64「Karte von Hoch-Asien」。
(69)陳寿彭訳『新訳中国江海険要図誌』（一）台湾広文書局、1969 年、10 頁、49 頁。
(70)同上、『新訳中国江海険要図誌』（七）、1295～1332 頁。
(71)G.W.BACON & CO., *New Large-Print MAP OF CHINA*, LONDON, 1900.
(72)RAND,McNALLY & CO, *MAP OF ASIA*, New York,1901.
(73)GEORGE PHILIP, *PHILIPS'NEW SYSTEMATIC ATLAS*,LONDON,1926.「ASIA POLITICAL」p.45,「THE FAR EAST」pp.54-55. そもそも英語名称の Spratly は、1843 年にこの島の傍を航海し、ロンドンで航海記を発表したイギリス人船長 Richard Spratly にちなんで名付けられたという。実際、最初に南沙諸島の領有権を主張した国は大英帝国だった（1877 年）。
(74)GEORGE PHILIP,F.R.G.S.,*PHILIPS'CENTENARY HANDY GENERAL ATLAS OF THE WORLD*, LONDON,1934,「ASIA- PHYSICAL」pp.107-108,「ASIA:GENERAL」pp.109-110,「EAST INDIES」pp.129 -130.「CHINA」131-132 頁。
(75)ARMY MAP SERVICE.U.S.ARMY, *The World*, WASHINGTON.D.C.1944.
(76)Rand Mc.Nally&Company, *RAND Mc.NALLY POCKET WORLD ATLAS*,1956,p.70.
(77)C.S.HAMMOND & COMPANY, *HAMMOND'S WORLD ATLAS*,N.Y.,1951,pp.26-27.
(78)RAND McNALLY & COMPANY,*GOODE'S WORLD ATLAS*,1964,p.151,p.154.
(79)HARPER & ROW,*POLITICAL HANDBOOK AND ATLAS OF THE WORLD*,N.Y., 1965.「EAST ASIA」p.341,「SOUTHEAST ASIA」P.339.
(80)DJAMBATAN・AMSTERDAM,*ATLAS OF SOUTH EAST ASIA*,1964,p.2,p.18.
(81)RAND McNALLY, *Premier World Atlas*, RAND McNALLY&COMPANY,1967,p.35
(82)HAROLD FULLARD,*Philip's Pocket Atlas of the World*, MARUZEN COMPANY, 1970, pp.48-49.
(83)TIMES BOOKS, *THE TIMES CONCISE ATLAS OF THE WORLD*, 1978,p.67.
(84)G.& C.MERRIAM COMPANY, *Webster's ATLAS and zip code directory*,U.S.A.1973.
(85)TIMES BOOKS, *The Times Atlas of the World*,1975, Plate17.
(86)P.J.M.Geelan, *The Times Atlas of China*, TIMES BOOKS,1974, pp.115-116.
(87)*Philips' CONCORDE WORLD ATLAS*,1976,「CNIHA」p.77,「EAST INDINES」p.72.
(88)RAND McNALLY & COMPANY, *Goode's World Atlas*,1978,「CHINA」p.193,p.196.
(89)Peter Hall, *The New Penguin World Atlas*, Oxford University Press,1979, pp.34-35.
(90)前掲『日本古地図大成－－世界図編』、33 頁、34 頁、62 頁。
(91)同上、76～77 頁、81～86 頁、90～91 頁、103～114 頁、116～117 頁、118～119 頁、120～121 頁、122～123 頁、124～125 頁、126 頁、127 頁。
(92)同上、138 頁、153～155 頁、156～157 頁、158～159 頁、160～161 頁、163 頁。
(93)同上、188～189 頁、204 頁、232 頁、250 頁。

附記：本論文は、山陽学園大学令和 4 年度学内研究補助金によって進められている研究成果の一部であり、ここにて厚く謝意を表する。